

日本 戦闘の 者



荒谷 卓 (あらや たかし)
 生年月日：昭和34年秋田県出身
 略歴：昭和53年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職(1等陸佐)。海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。
 平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。
 平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会：熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める
 著書：『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ』『特殊部隊vs.精鋭部隊—最強を目指せ』並木書房／『自分を強くする動かない力』三笠書房
 熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス
<https://musubinosato.jp/>

032

国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里
 代表：荒谷 卓



明治神宮武道場至誠館の館長として力を入れたことは、海外の日本武道を学ぶために日本文化を正しく伝え同志をつくることであった。海外では、日本人の想像を超えて日本武道に対する関心が驚くほど高い。この人たちは、単に術技として武道に関心を持っているだけではなく、その精神性、つまり日本文化に対して強い関心と敬意を持っている。これは俺自身驚きであった。自衛官時代には、ドイツ留学や米国留学の他、国際軍事交流で米国、ロシア、中国はもとより欧州、アジア、豪州等に出張し、多くの国々の軍人と対話した。また、世界特殊部隊会議等の国際会議や多国間軍事セミナー等に日本代表で参加してきたが、日本人に対する敬意の念のようなものは感じられなかった。軍事という実力組織の場では、米国と憲法に管理された『戦わない自衛隊』に対して敬意を抱かないのは当然である。他方、世界の軍事大国と同等以上に戦った日本帝国陸海軍に対する畏怖の念は強い。例えば、ドイツ留学の時に強く感じたのは、頻りにテレビで放映される特攻隊員の映像をみて、ドイツ人をはじめ海外の多くの人達が日本の戦闘者に強い尊敬の念を持っているということであり、世界中の軍人が『いざとなると日本人は特攻戦士のような強さを表すのではないか』という畏怖の念を持っているということであった。俺たち日本人は、先人が鬼神のような戦いぶりをしたことによって恐れられ警戒されて安全を保っている。つまり、日米同盟とかへなちょこ憲法とかで日本の安全が保たれているのではない。日本の戦闘者が世界に示した歴史によって日本が守られているということだよ。

自衛隊を辞めて、日本武道の指導者として海外にわたり、あらためてそのことを確信した。「私は神風の精神を学ぶために日本武道を志した」と言うスイスの女性の言葉はそれを象徴していた。

俺はまず、明治神宮武道場至誠館に稽古に来る欧州を中心とした海外の武道家に声をかけ、国際至誠館武道協会(International

ISBA講習会での指導風景。



Siseikanbudo Association：略称ISBA)の設立を呼び掛けた。平成21年(2009年)に創設したISBAの初代会長は、元在日ポーランド大使で、その後ポーランド外務副大臣(当時)に就任したイェジ・ボミアノフスキー氏だ。創設時9カ国14道場で始まったISBA(俺が館長をしている間に12カ国45道場に拡大)の設立主旨には、「武道は日本の伝統文化に根ざしたもので、今日の世界的人類遺産の中でも極めて価値のあるものの一つである。日本武道の力と簡潔な美しさは、人間を惹きつける特有の精神と結びついており、そしてその精神は日本人のエトスとも言える基礎を形成している。それによって、我々は世界の運命を正しく豊かな道へと導くため、民族間の理解と親和を強化するに努めようと思う」と記されている。この主旨で大事なのが、武道は日本の伝統文化であるが、実はそこには世界の民族に共通的に存在するエトスが含まれているのだと言っているところだ。彼らは、武道精神には人類共通の普遍的な精神価値が存在すると考えているのだ。

ISBAの主催する国際武道講習会も、毎年、国と都市を変えて開催された。これらの講習会に参加した人々の声をいくつか紹介する。イスラエル人でオクスフォード大学で哲学の教鞭をとっていた参加者は「私達は皆、恩恵を与えてくれた祖先に借りがあり、その借りを次世代に返す役割があります。この恩恵に対する『感謝のこころ』は伝統的では受け継がれていても、個人主義的な現代社会では失われています。日本の社会には『感謝のこころ』がしっかりと認識され、存在している事を知りました。この『感謝のこころ』が、日本だけでなく、世界の国々の多くの文化で共感できる価値観だと思えます。この『感謝のこころ』を持つことによって、人々が同じ土台に立てるので」という。イギリス人エンジニアは、「日本の文化には、他人に対する思いやりとコミュニティの統合力が存在します。日本人は気がつかないかもしれませんが、他人への配慮や思いやりの文化は、日本社会の隅々まで浸透している神道のお陰だと私は

確信しています。祖先を崇拜し、自然や人々との親交を大切にすることは人間が存在する本来の意味であると思います」と言った。平成23年(2011年)、東日本大震災があった年、フランスで開催されたISBA武道講習会の開催



趣旨は次のようなものであった。「市場中心のグローバル資本主義によって、我々は本来人類が歩むべき正しい路線から著しく逸脱しつつあり、人類はおろか地球環境全体までも荒廃へと突き落とされかねない危機に瀕している。我々は、武道を通じて、この現状を再考し人間の本来の立ち位置に帰ることを提案したい」。この講習会に参加したフランス人女性は、騎士道と武士道の違いについて次のように説明した。「騎士は貴族の奴隷の中から生まれ、後に教会が軍事力を所有するに際し、野蛮な騎士にキリスト教の倫理規範を宣誓させた。それが騎士道と呼ばれるものである。この従属的倫理規範は、騎士にとって主に当たる教会と貴族が革命により失権したことで、完全に消滅した。他方、日本武士道は人間個人が主体的に確立する倫理規範であり、教会や貴族等の権力に従属するものではない。だから、日本において近代化が起こり武士が消滅してもなお武士道は存在し続けている。この日本武士道の主体的倫理規範に価値を見出したフランスでは、青少年の道徳教育に武道を取り入れている」ということだ。

俺が館長として最後のISBA武道講習会もフランスのカレーで開催された。この講習会では、主催者の強い希望でドーバー海峡での禊行を取り行うこととなった。120名の参加者が、風が強く波の高いドーバー特有の気象の中で海につかり大祓祝詞を奏上し、日の出とともに三々七拍子でめでたく行を終えた。この禊行を通じて多くの参加者が、日本文化の根源である人間としての一体感、自然との一体感、そして宇宙との一体感を体験することとなった。



左の写真はISBA講習会inポーランド。上の写真はCSBD講習会inモスクワ。武道を通じて日本文化を世界の 人々に伝えてきた。

平成23年には、同じ趣旨の組織がロシアに創設された。ロシアのモスクワを中心に、サンクトペテルブルグからウラジオストックまでに広がる至誠館武道共同体(Commyty Shiseikan Budo Dojo：CSBD)という組織だ。ロシアにこの団体をつくるときには、もめごとがあった。「武道稽古に入る前に神道の祭祀を執り行う」と俺が言うと、参加者には「ロシア正教徒が多いのでやめてほしい」という。「俺は、君たちの信仰に関与するつもりはない。ただ、日本武道は神道を起源としているので切り分けることはできない」「祭祀に参加しないものは見てもらいたい」と言って神道の祭典を始めた。祭壇には、ロシアの会場の常緑樹を神籬として奉りロシアの土地の神を祀った。また同時に、日本の武の神「鹿島神宮御祭神タケミカヅチノカミ」と「明治神宮御祭神明治天皇」を共に祀りし、参加者全員の真摯なる稽古を神々に奉納する旨祝詞を奏上した。この様子を見ていた正教徒のロシア人は、全ての神々を祀る日本の神道に感動し、これ以降、彼らが自ら進んで祭壇をつくり神道祭祀を主宰するようになった。CSBD代表のコロナノフ・ウラヂスラフ氏は、CSBDを創設するにあたり次のように言った。「武士道は私に、人間の原点に帰ることを教えてください。心と精神と肉体が調和し、正しい判断のもと誠実に道徳的に行動することや、他人の利益のために自己を犠牲にすることを恐れない日本の武士道は、世界に類を見ない崇高な精神です」。

CSBDの主催する武道講習会も、毎年ロシア国内で場所を変えて開催された。敬

虔な清教徒で極寒の地ウージンスクから参加した消防士は、「武道を学ぶことによって、生きている限り誠実であれということ学んだ。もし、自分のためにだけ生きるとしたら、死後、何も残るものはない。この人生を意味のあるものにするには、他のために生きることである。『この生き方がなんの役に立つのか』という問いに対して私の答えは、目に見えない精神レベルで私達は一つであるからだといいことだ。人を助けることによって、その一つの存在を癒し、力を与えることに関わって行くということである。死する事は難しいことではない。それよりも、正しく生きることの方が困難なことである。誠実であれということ、たとえそれが敵対するものに対してでもである。誠実であるということは日本の美徳である。他者のための自己犠牲を日本の武人は体頭した。これが真の武道の目的であり意味である」という。モスクワの特殊部隊アルファの隊員は「際立った大任であろうが、日常生活の俗務であろうが、それぞれの課題に全力で、専心に、内面的正しさと真っ直ぐな精神で取り組むことが武道であるということが分かった」と言った。

日本人以上に日本の戦闘者の精神をよく理解してくれた海外の同志と巡り会えたことは、本当に有難かった。彼らとの絆は、俺が至誠館の館長を辞めても続いている。残念ながらコロナをつかった恐怖による管理社会が世界的に広がってしまったので、直接交流できるチャンスを失っているが、彼らとは今でも緊密に連絡を取っている。いずれ時が来れば、志を共に力を合わせてよりよい世界創りに邁進する日が来るだろう。



ドーバー海峡で禊行を取り行う海外門人と筆者。

033